

繪本西遊記

初編

二

遠  
2500  
40-2



門へ遠  
2500  
40-2

翻 譚 書  
倭 軍 書  
唐 軍 書  
隨 筆 物  
國 々 名 所  
近世戦争書類

繪 本  
書 本  
滑稽物

曲亭馬琴之作  
其外諸先生作  
軍書  
敵討  
諸家騷動  
御捌物

右之外數品は、此は所記の如く、宛々程奉忍の也

書物債本所

東京牛込細工所  
誠光堂 池田屋清吉

繪本西遊記卷之二

池清

四海千山皆拱伏

九幽十類盡除名

孫悟空ハ混世魔王と退治し水簾洞に留りて後屬下の猴等  
とありの如くに武藝と習得し傲來國に於てあるこの弼殺兵  
器と集ひとり小猿どもにこの如くしるす中と守るの儀いと  
なり其身ハ龍宮城に至りて武器ととりとめんとかの水簾洞の橋の  
下に下り雨水の法流はうひ波濤と續り終に東海龍王の都に  
忽ち海庭を見らうとる役人巡海夜叉といふ者悟定を見し其  
いなり你ハは何所の者たれば家よまなく王城を元規へやと外に  
に悟定こそとて吾ハ翠果山の天生聖人孫悟空といふ者なり



東海龍王

夜叉

龍王見悟空  
賜兵器



水晶宮

西遊記卷之...

却て我を知らざるは何事ぞや夜又これとすて急ぎ龍王に告ぐ  
言上は東海龍王忙ぎ出迎へ誘ひて殿に上り同て曰く上仙何の  
時道を得て何の仙術を得かひるや悟空曰く我生れ出ると其  
後出家修行し無生無滅の體を得たるを我着属するに  
お義を習ひ及により恃に來りてお物を需んとし龍王とて易に  
事とていとそ其重と二千六百斤の九股又と七千二百斤の方天戟  
とより出く悟空が前にさし置き悟空よにとりておろく試くらう  
龍王と顧て曰く我かゝる怪き武器は是をばりふれよにたゞはる  
おのき武器と出りてよへる龍王の曰く上仙おのき武器とてとめ  
給り我海藏中に收りたる神珍鍔の如意棒と目とを誘ひて  
海藏に在る悟空近よりて是と見れば鍔の長さ二尺五寸ありはして

金色の光輝く兩端に金の繩と入れ如意金箍棒重一萬  
三千五百斤と一行の文字を携はけたり悟空より両手にとりて  
け棒とより上恨らけけ棒の長く余りたりと其の言ひまじ  
終らざるに不思議なるをば鍔棒忽ち縮まりよりて悟空が手に  
かまひるるまじの棒とて悟空大にあやしむ龍王に向  
て其故を問ふに龍王の曰くは神珍鍔の棒は往昔夏の禹王水と  
治りむひの時海の深さを定めむひに定子より伸はるは上は二十三  
天より下は十八層地獄に及むと縮まる時は僅に二分半の  
鍔を針とよりて耳の中に藏し入る真に奇妙の如意棒なり  
空をこきりて大きにゆるるを甲やあるらるるいと清くはるる  
藕絲歩雲の履一雙鎖子黄金の甲一副鳳翅紫金の冠一項

悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>  
眠<sup>ね</sup>松<sup>しょう</sup>  
下<sup>か</sup>到<sup>たう</sup>  
真<sup>ま</sup>界<sup>かい</sup>



とどろき出てあぐなれば悟空よろこぶと斜に尻を尻に龍王に列  
もを告げ水簾洞へ降りたる室にふりしの事のけりたるハ一日悟空  
醉に糸の松樹の下に睡眠する者二人出たり悟空  
と引く大ききる瀛門の前に至る悟空頭とよみ城門と見れり二つの  
鉢牌に幽冥界の三字が書く悟空問て曰く幽冥界は閻王の  
居所にあたり何の事ある我とて所よいざまひまじりやかの兩人  
答てい、你今娑婆の命救ふにやう我等兩人句はもてま  
まねり悟空聞もあはれ大きに怒り身の中より件の如意棒  
ととり出し其長一丈六寸の續棒とて唯一歩にの西人とて打殺  
續棒とて車にまらして城の中へお入るありこの鬼どもを殺され  
森羅殿に逃上りさらざる事大なることなり十代冥王これとて

怒りて追々悟空と見て其姓名と問へ悟空は時たまに啼いて  
曰く你等我名と知るべし何ゆへ人とて迷ては所よいざまひま  
るや我は是華果山水簾洞天生聖人孫悟空なりえ末仙道と  
修行し天と壽とある事一三界を歩み遊同と去れり然るに  
なんぢらいろいろまはれ我命救の法をさるる事や冥王の曰く  
上仙より怒りてとて冥王天下の程に名の同じきものもあはれ  
是かき人措く事や冥王悟空曰く我曹を問てあり你等  
冥官の記し置 生死の簿子ありとて冥王持来り我に看  
せし冥王乃掌中判官とて生死の簿子とて冥王出たり悟空  
はにらうてうかへしと見ると冥王の類ひの中に孫悟空とて冥王の  
石猴壽三百四十二歳善終とてとて冥王記せり悟空等とて



繪本西遊記

真黒にこれをわろ減し其れ余推の名あるものとてくく減し  
終りの如意棒とてうまは冥王の物とて幽冥界とあると  
ありつゝ心夢のそらうら今に到て推の類ひの命長き後生  
先の簿子に名を除去さるる故うらとやらるはとん東海龍王六孫  
悟空無體に武器とてうゆり事と憤り表と作て上天玉皇上  
帝に奏聞し其罪とれしむらん事と告せむ又幽冥より教主  
地藏王菩薩よりも悟空が生死の簿子とわろ減らるはし訴え  
ぬま玉帝文武の仙郷とゆめはやく討手成下とんと議し  
るに大白星とてとて奏しるは推今既に仙道と修ぬと  
獸の類ひにあはれ今勅使を下して彼と天上にりし上し官職  
授けしは如に留め置き名天命に順る再し恩賞と行ひ  
天命に遠いまは其れとて刑罰とれしむ玉帝をいふとて  
るに即ち白星と勅使とて華果山とて下されり

官封弼馬心何足

名註齊天意未寧

白星の玉帝の命に交既し水簾洞に至り孫悟空に對面し  
勅使のとりひき審み述べれば悟空一言の異議に及びて白星と  
るは後とて天上にりし靈霄殿の下に多うて玉帝と孫と玉帝即  
悟空とて弼馬温の職と授けしは弼馬温の職ハ馬と養へ後  
にて甚といひ官なれども悟空之末官職の高下とて及より  
ひて任に到りて己に月と経らるら同寮の官人ごおがら馬を  
やの奴官のうと始りて牙と咬んで大に怒り我花果山の在り





既に王位にのりて如何ぞ我とあざむき来りて馬以養ふ  
まむるやとて勿心耳の中より如意棒ととりて愛とて一  
の儀棒とは御馬監とをりしむる花果山を去りて馬の衆  
衆にらまうむ久大王天上にありて榮光を多し人から人掃何もの  
高官とて得てあつとて同入悟空憤然と答て曰王帝え来んと  
用ゆるとぞ知れ我馬と巻く甲き職を授け頗辱とあて  
えと先ん依り遂にきてまにえまう衆衆是とて中より大  
王は洞中に在りて觀樂に足ざるには何の足らりて人天上にあり  
かるい甲き職とまむるや我後快く酒とをりて大王の胸と  
やとちをらんとおと酒宴と傳へ良由と傳へる時に獨角の鬼二人  
赫黄袍一領と獻し孫悟空が前に再あり永く甲下れ属せんと

とて悟空大さのりて久の鬼兩人と先陣の大なる  
定め赫黄袍と身に着し自ら齊天大聖と稱し一つの  
大旗には四字と書記し洞門におし立天兵もも押来  
たふ只一息に付破らんと勢ひ猛にやち居りけ時天上  
小孫悟空職を授て下界へ出奔せし奉其後又おとて  
かゝとて文武の仙郷詮議の上を多く追討あるべきに  
托塔李天王と其子哪吒を子と降魔大元帥となし  
下界に向て進發ある李天王の先降巨靈神真先に宣死  
斧と提水簾洞小跑来り魔賊孫悟空はいけくに在るや  
李天王部下巨靈神將追討のくちを去れ来りはやくして  
勝負と決せよと大音に叫りれば悟空其時獲子黄金乃

此を  
諸君  
直見  
山  
猿  
軍の  
強き

事  
人目  
之  
の  
目  
は  
何  
か  
か  
か

悟  
空  
歸  
簾  
洞  
為  
軍  
防



即  
振  
軍  
威  
天  
下

悟  
空

猴  
牛  
鬼  
王



齋  
天  
大  
聖

此  
所  
謂  
井  
底  
之  
蛙  
年  
滿  
無  
息  
中  
振  
鬼

繪本西遊記初編卷之三

九

甲と着し如意金箍棒と提らしこの様と引領門外に走り  
出巨靈神の向入てし你立用の言と費さば早く天上に  
降り玉帝に奏し我と齊天大聖の官に陞さ我軍兵  
動しは着是に順ごん靈霄寶殿にお上り玉帝と追は  
我其後にかるべし巨靈神をとりて大きに怒り斧とまほ  
て斬りかゝる悟空件の如意棒と振りて逐く我をいし  
三合ちりごるに巨靈神が宣花斧を中よりおとりれ心驚  
幸陣うて逃ゆ哪叱を是と見て忽三身六臂の形お  
変し斬妖劍 破妖刀 縛妖索 降妖杵 绣球兒 火輪  
兒の六般の兵器とたづま悟空と目つけおてかゝる悟空も  
進んで闘ふ事平す時どろいしと勝負もかんえさる如に悟空  
一根の毛と抜て忽多とて我身とほ前面にありて哪叱  
と戦ひ正力の悟空の哪叱を子づ後にたゞり如意棒と上て  
たの肩とをのしと討びさしも勇猛の哪叱を子この叶いと  
やおとひらん是も本陣へ逃入り大元師李天王を是と見  
て大きに獨き凜かくのどき神通あり急に征せんとおこ  
ふ急うらべ一先天上に降り降儀の上加勢をとめて再是を  
討べしとて遂にを子と共に軍務とやうら天上に降りあつと  
奏聞され玉帝と神におとろさむい誰う李天王を助ては  
魔賊を捉へしやとつりるに右白星とて出て奏して曰  
只今加勢とつりし急に攻め給ふもたやとく務利とほと



玉皇殿

玉帝封  
元帥降  
簾洞



孫悟空

そと本たりしは、渠が望にやうせ、齊天大聖の宮とありて、此の  
やうにせ養ひ置る入時の天地の間、永く静謐にありて、玉帝  
は議に従ひ、玉の重て太白星と勅使して下界に向く、遂に  
ある太白星則水簾洞にあり、悟空に對面し、我玉帝に奏し  
足下と云く、齊天大聖の宮と請ふたりや、天より上りては、官  
と降るし、ゆるとや、われは悟空是と、言て甚と云はる、再び  
太白星に云く、言ひて天上より顔る。

亂蟠桃大聖偷丹

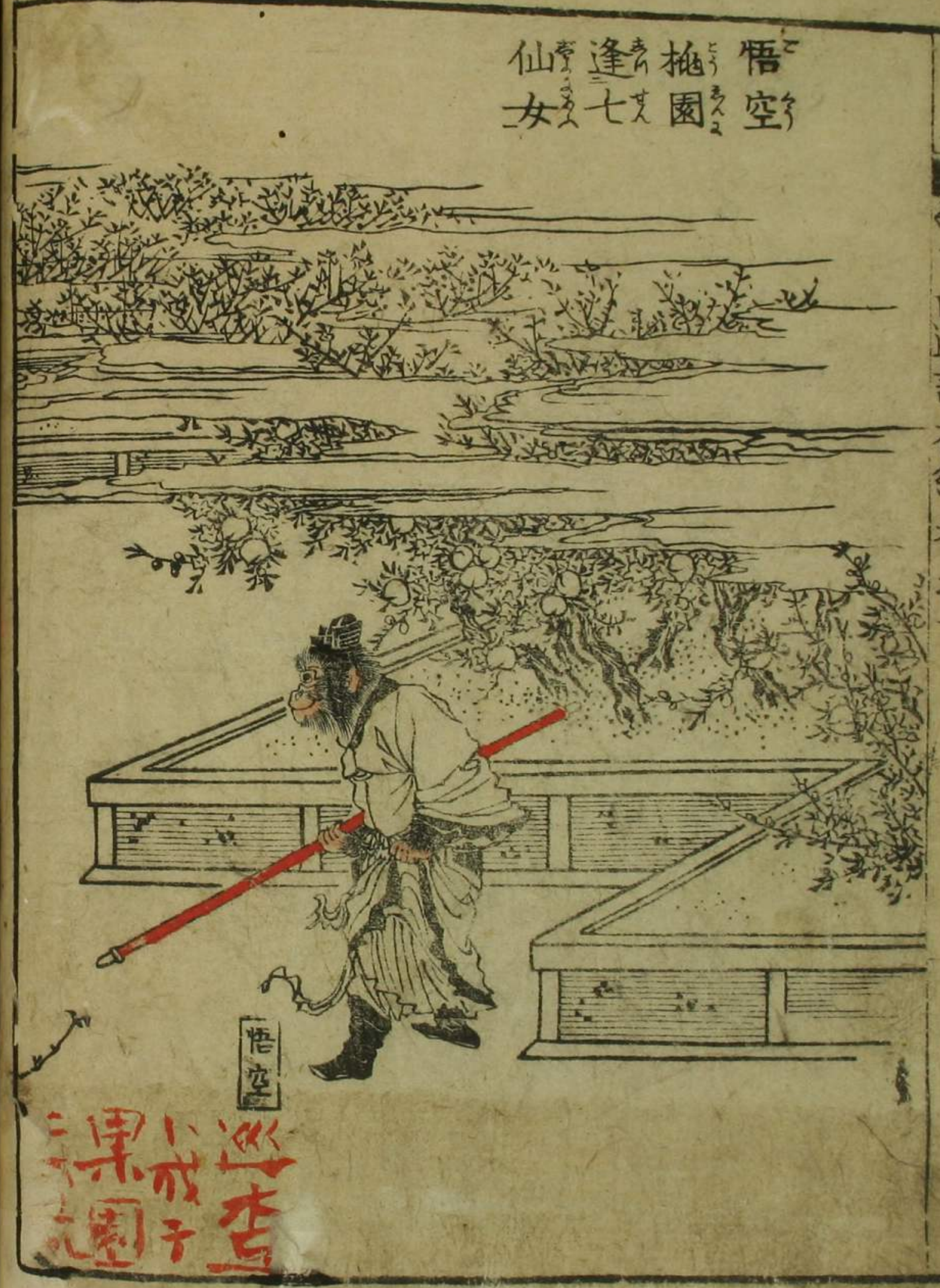
及天宮諸神提性

さる神より玉帝君は孫悟空と封じ、齊天大聖に蟠桃  
園と權官と云く、むは蟠桃園より八千六百株の桃の

と、摘らるる、前の方一千二百株は花微菓あり、小に  
三千年に一度、是と云く、者は仙道は成就と中の園  
のあり、一千二百株の桃は花層ひらきて、實もや、其は  
千年に一度、熟と是と云く、者はよく長生不老と、雲に  
よりて飛行、後の一千二百株は、系の級と云く、この核より  
九千年に一度、熟と是と云く、者は天地と壽を同く、日  
月と年とも、悟空これと、言て一日衣裳と被く、この樹  
上にかき登り、熟せし菓を、つくまで偷し、吃ふは時、玉帝乃  
御后玉母、蟠桃會とほして、天仙と云く、このむ、んとて七仙女に  
作て、桃の實と摘せ、後七仙女のく、花籃とたけ、桃  
園にあり、齊天大聖の告く、園に入らば、とて、あかしく尋ひ



仙逢樵園悟  
女七艾空



悟空

梁成巡查  
園子

西遊記卷之...

これらも悟空ハさらさらと只冠は衣束のと樹下に脱捨する仙  
女ともせんくまき樹の下に立より多くの桃と摘りたるは時  
悟空ハ其長二尺寸の小猿と愛し一桃の實に喰飽て南の枝の  
木の多し原もく眠るありし物音に目せり俄に奉相と現し  
耳の内より削の金箍棒と制守出し大音に々々你等何者なれ  
挑と偷むや我悉討殺とて一と罵りたれば仙女等大きにお  
どろき地に跪て中々大聖怒り氣息たす只今王母蟠桃  
會をかりおらんとして我後今令じて挑の實と摘せ給へん大  
聖とてつめて告やさんとあひひかとも大聖をさうんはあらは  
刻限の速なるまらんと押して園に入れぬ希く罰とをせしと  
悟空が曰く王母會となりて誰人ともやうのさかまをて仙女の曰

西天の佛老菩薩聖僧羅漢南方の南極觀音東方の東  
恩聖帝北方の北極佐靈中央の黃極黃角大仙其外八洞  
の尊神とてく集りあひひなり悟空の曰く我ハ是齊天大聖  
の官仙術にあわく至らざるはさう一は王母の蟠桃會  
に我をさうのさかまをて、何ぞぞや你暫くは所にありて五清息  
と待て一則定身咒と唱へ仙女にむらひ住まれくと叫ばると  
七仙女皆樹の下に身成よせてさうれ一歩もうごくと奉あこ  
ころ悟空急に雲にまき入り寶閣瑤池ふりてみるはさか  
の弥味いろくの嘉肴うが高し積とたうと右の長廊に酒饗  
あかさの數十人の官人傍に並居てこの酒肴と護り居たり  
悟空このけりさうとらと穴覗がひ見方の毛二十根と扱

會入西天玉皇元君



悟空 矢路  
到兜 卒天



繪本西遊記 初編 卷之十一

太上老君



繪本西遊記 初編 卷之十一

に中に入ると瞬時に噴き出しに忽ちの瞋睡虫と愛し守護  
の官人に向つてとびかかれ不思議なる我一人もあつた水倒  
もてねむり入るに後には悟空則走りよる  
かの酒肴と引ちりし意にまうせて飲取醉にふどと走り出齊  
天席といそぎ一ぐらうじて道と踏たぐらん兜率天と至る  
けふのち上老君の住む所なるが折節老君法と説る人に  
仙童等聴聞にせし一人も門と守るのまゝ悟空おしよると  
亦親ひより仙家の寶ととる九轉の金丹と葫蘆の中に納五ツ  
せし財と悟空は金丹を傾けとぐく吟ひて今我身の  
罪抖重なる上玉帝より西天門より走り出と一糸も華果山へ  
身の法を法と西天門より走り出と一糸も華果山へ

んのは時天よ玉帝悟空罪と犯しとと誅しむらん  
して十万の天兵と發し下界に下し入其先陣の大  
お九曜星真先に水蘆洞におしよせ孫悟空いつくにあつ早  
来つて我と戦ひ交へると大音に鳴られ孫悟空も如意  
杖棒とまの向にさかば門外に躍り出九曜星と二十余合  
戦ひし九曜星終よかまらば本陣へ引入り是とて天  
軍は四丈天王二十八宿隊と別ち隊をかゝり悟空をめぐり  
押来れば悟空もやうと味方と下知し独角鬼王七十二洞の妖  
王とはじめ数萬の羣猴と率て陣と射し相うまにかり懸  
叫んで我ひらうが鬼王女王等おしよけて孫悟空に生どられ  
衆猴もまんぐに成て水蘆洞へ逃る悟空は是とて

大百卷の切端

四大天神  
與悟空戰



西遊記卷之...

四大天神托塔哪吒と相争りて大死を蒙りて我々の通同と  
見て一把の毛とぬき百千の悟空と争りて我々の通同と  
争りて群がりかつかつておまればとろくの天神さうかみはあめ  
て引退く悟空もさうと強らふと追ぎ毛と集て夕にぬり明日  
の軍に大神通とほろひ天狗と生捕りて其日の水窟洞を  
かたりたる

観音赴會同原因

小聖施威降大聖

以時南海の觀世音菩薩其弟子惠岸行者と引はれ蟠排會  
に赴きつた悟空會と亂し罪と犯しと只今合戦のち中から  
圓ひの惠岸とを引て軍の勳聲と見せしめし惠岸則法海

携てて華果山に來り自ら轅門を出て悟空と見り其時悟空  
も衆衆の中より如意棒と打ちたりと出惠岸と目つけ只一か  
討でかろ惠岸元來勇猛不双のふとられかたれ日く法混さ  
去るさうす時中も我らひし惠岸終に敵とる本あさるはこれ  
本陣より引退さうけい玉帝の令甥顯聖真君灌江口におり  
が加勢のさあとして本部の神兵と引領し鷹ととくと幸せ果  
山に來りて四大天王と天王とさう出途て對面し軍の次子詳  
らうに述べたれ神君さうい妖魔つらう神通と得たりとも  
我がさうい擒とさう四大天王の我我とい接るともに方さうと  
逃る敵と打ちて托塔天王の空中に在り熒妖鏡を以て衆  
を隠るすを照しとさうかんと定められハ真君三つりり

兩將現  
神變大  
合戰



神兵を引く水簾洞のちりよせ岡の声を上りたり悟空列の  
狭棒を打ち一語の同答も及ぶ真一文字に討てかり  
真君と相むる我う入事二時どりりよせ務負も見てさうか  
直君大神通の天おたれべ一とび刃を揺ととんえし其長  
高き事萬丈余り緑の面もまひの髪上下の牙長く生まひ  
三尖利刃鋒を擧て只一打に打んと及悟空すく神通とつひ  
真君とおほさるの萬丈の貌と多ど狭棒とやどく我入事  
一時余りめふ真君陣中より殺多の鷹と放ち去と追ひてむ  
も猿を追まると猴ども大きた怒るき懼も四方へまると逃散  
悟空を見て心膨ろき急に法象と收り本相とあらは水簾  
洞逃入らん及四大天王の四方をかここれい是にさ

られて洞中へ入事らう如意棒と殺して纏花針とは耳の中  
へ納り身と愛どて雀となり木の梢に飛上り真君を見て其  
身と鷹と多ど一とつて飛んで撲んと悟空又大鳥とさうて天ふ  
よも真君もさう大鳥とたひと追へ悟空あはれ  
真とたもは真君忽ちう真鷹とさう悟空蛇とさうれは  
とさうこれと尋ぬ悟空今詮方なり一座の土地廟と身と  
化し真君見くけなら前戸扉の葉がはるべしけを困ん  
とせ我も先と嚙傷るべし上の方の二つの窓あは必眼を  
一打に打ち潰れべしと拳をよくらたんと悟空は大き  
怒るき眼とほぶされたかさうと急ぎ身をのりて空  
中に飛上り跡かともなく去りたり

池清

